

ヤオコーは2012年に創業120周年の記念事業として、埼玉県川越市にヤオコー川越美術館を開きました。日本を代表する画家の三栖石嗣さんの作品を展示しています。私と三栖さんの作品との出会いは、ヤオコーの昔からのお得意さんに頼まれた母が、個展を見に行き、買ってきたコスモスの絵です。無駄遣いを嫌い、絵画にさほど興味がなかった母が絵を購入してききましたので、私たちは驚きました。それだけその作品を気に入ったのでしょう。私たちも素晴らしい絵だと思いました。

以来、三栖さんと私たち川野家との家族ぐるみの付き合いが始まりました。そんなある日、三栖さんから母を中心にした川野家の皆さんを描きたいとの話がありました。家族12人のそれぞれ的人物像をイメージするの骨が折れたのでしょう、完成までに3年がかか

## ~HISTORY~ 暮らしを変えた立役者

りましたが、家族全員が集う絵を描いていただきました。120号の大きなものです。その絵は今、私の執務室に飾ってあります。



画家の三栖石嗣さんが描いた川野家の肖像画

で説得していただきました。嵐山町はヤオコー創業の地、小川町の隣町です。母の自宅も近くにありました。ライバル店が看板を掲げるのほどうしても阻止しなかったのだと思います。昔の教

### 母の築いた礎振り返る

#### ヤオコー川越美術館 開館

く姿に心を寄せられたのだと思います。「いい家族です」とおっしゃっていますね」とおっしゃっています。それだけ母の存在感は大きかったです。晩年も済んでいました。しかし、母は体調が優れない時が多かったのですが、ヤオコーの発展に懸ける執念は全く衰えていませんでした。

え子はもちろん地権者の母への信頼が計画を覆す要因になったはず。母の商いへの「想（おも）い」の強さと、勝負への執念を感じる出来事でした。母にはこんな思い出もありません。益暮れの贈り物を選び、贈る相手の体格や好みを確認しながら一人ひとり自分で選んでいました。毎年その数は100人を超えていたと思います。

それを改めて感じた出来事が1999年の嵐山バイパス店（埼玉県嵐山町）の本店を巡る交渉です。嵐山は母がかつて小学校の先生として働いた町です。そこ

が、地権者の方々を膝詰めで説得していただきました。嵐山町はヤオコー創業の地、小川町の隣町です。母の自宅も近くにありました。ライバル店が看板を掲げるのほどうしても阻止しなかったのだと思います。昔の教

日経MJ 2019年7月12日掲載